

東海道五十三次

てくてく歩く日帰り一人旅

太田康直

東海道五十三次 一知られざる穴場— その⑤

ほどなく国道1号と分かれ、左の道幅の狭い旧東海道へ。やがて一里塚跡の標識があり、由比宿（16番目）に入る。



（歌川広重 由比宿）

往年の宿場の面影が色濃く残っていて、時代の流れから取り残されたかのような、静かなたたずまいの宿場である。ここでの売りは東海道の遺跡でなく、由比正雪と駿河湾でしか採れない桜えび。東海道広重美術館と併設の東海道由比宿交流館がある由比本陣公園と、道を挟んで向かい合っこうやて建つのが、由比正雪の生家である。正雪紺屋という暖簾を出していて、今でも現役の染め物屋さん。正雪（1605－1651）は楠木流軍学を修め

3代将軍家光没後に倒幕を企てて失敗、自刃して果てた。我らの世代には知名の人。一方桜えびの方は、街道に卸売り店や小売店が並んでいて、草鞋・脚伴の旅姿で弥次さん喜多さんの等身大の人形を店頭に立たせている料理屋まであった。

正雪紺屋から少し西に進むと大きな「馬の水呑み場跡」が往時のままの形で残っていた。小規模のものなら岡崎宿でも鈴鹿への坂道でも見かけたが、大名行列の馬たちにいっせいに呑ませることが出来るほどの大規模なものは、ここ以外に残っていなかった。立派な遺跡だが殊更観光の売り物にしている形跡はなかった。くれぐれも見落とさないように。

薩埵峠への上り道に差し掛かる左手に、官軍に追われた山岡鉄舟が座敷の地下から舟で清水港に逃れた「望嶽亭」と呼ばれる茶店、藤屋が残っていた。鉄舟が置いて行ったピストルを展示。鉄舟はこの後、清水次郎長の助けを得て府中宿で西郷隆盛と会見するのである。薩埵峠からの眺望は今や、バスツアーの観光スポットになっているので割愛。



(歌川広重 興津宿)

峠を下れば興津宿（17番目）。由比宿と対照的に昔の面影は何ひとつ残っていなかった。代わりに私なりの興味で、目についたものの幾つかを記してみることにする。

宿場へ差しかかる地点で目を引いたのは、「女体の森 宗像神社」の思わせぶりの碑。さらに西に進むと右手の石段の先に清見寺が見えて来る。このお寺、山門と境内を引き裂いて東海道線が走っていて、初めての目には奇異に映る。そのことに疑問を持った山下清画伯（映画『裸の大將』のモデルになった画家）の『清見寺スケッチの思い出』からの長文の抜粋が碑になって建つ。鋭い文明批評になっているので、自ら確かめて来てほしい。

さらに西に進むと左手に清見瀧公園。公園内に井上馨の銅像が建ち、井上公旧邸跡もある。次いで坐漁荘。ここは西園寺公望の別邸で、その跡地が西園寺記念公園となっている。建物は犬山市の明治村に移築されたが、坐漁荘のそっくりさんが復元されて公開されている。大磯ほどではないがこの宿場も明治以降エライ人の保養地であった。



(歌川広重 江尻宿)

かつての江尻宿（18番目）の中心は、現在のJR清水駅前の清水銀座と呼ばれている商店街。東海道の遺跡はむしろ宿場を出て西に歩いて行く途中にあった。まず巴川に架かる稚児橋。家康の命令で架けられたが、渡り初めを勤める老夫婦が待機する前へ川中からお河童頭の稚児が現れ、橋を渡って府中方面に消えたことからの命名。現在の橋も四隅に河童の像が載っている。橋を渡り終えた所に「船高札」の碑。船の難破や破損時の取り決め事などが記されていた。次いで「是より志三づ道」の追分道標。久能山へ至る道である。その角に、赤暖簾と格子戸の古い店構えの老舗、「追分羊羹」。少し先の左手に「都田吉兵衛の供養塔」。俗に「都鳥」と呼ばれ、森の石松を殺した男。この地で清水一家の仇討ちに遭い、菩提を弔う者がいなかったのを憐れんで、里人が建てたもの。

さらに西へ進むと右手に「史跡東海道草薙一里塚」の標柱。日本武尊がこの野で火攻めに遭った時、叔母の倭姫命から頂戴した天の叢雲の剣と火打石で草を薙ぎ払って火の向きを変え、脱出に成功。以後草薙の剣と呼ばれ、熱田神宮のご神体。三種の神器の一。

次の府中宿（19番目）は、家康が少年期と晩年を過ごした駿府城の城下町として、駿河で最大の規模を誇った宿場町にして、現在も県庁所在地で県下第一の都会。都会ほど昔のものが失われや

すい例にならって、宿場の面影は殆ど残っていない。辛うじて伝馬町、札の辻、七間町、人宿町等の地名と枳形が何度も繰り返されている道に昔を偲ぶのみ。



(歌川広重 府中宿)

そんな府中宿での最大の収穫は「西郷・山岡会見跡」の説明板を、JR 静岡駅と新幹線新静岡駅に挟まれた繁華街の旧東海道沿いで見つけ得たこと。幕末の慶応4年（1868）江戸城に迫り来る新政府軍に対し、徳川慶喜の処刑と江戸会戦を避けるため勝海舟は、山岡鉄舟を西郷隆盛のもとに派遣した。鉄舟は清水次郎長の助けを得て、街道に居並ぶ新政府軍の間を馬を駆って走り抜け、ここ駿府に宿泊していた西郷と会見。文武両道に秀でた鉄舟の人柄に惚れこんだ西郷は勝との話し合いに応じ、これにより江戸無血開城への道が開けたのである。いわば日本の近代の夜明けを告げる大きな仕事をやってのけた幕末の二人の男がここで出会ったのである。陰で支えたのが街道一の親分こと、侠客の清水次郎長。

鉄舟と次郎長の出会いにはもう一人、当時幕府軍の海軍総裁であった榎本武揚がからむ。武揚率いる幕府軍艦隊が函館を目指していた時、銚子沖

で台風に遭遇し、難破して清水沖まで流されて来た咸臨丸の乗組員を、新政府軍が皆殺しにして海に捨ててしまう。新政府軍に睨まれる中、あえて火中の栗を拾うようにしてそれらの死体を拾い上げて手厚く葬ったのが清水次郎長であり、その行為に感激した鉄舟との交際がこうして始まった。明治維新後の次郎長は鉄舟の感化もあり堅気に戻って、三保の新田開発、巴川の架橋、油田開発、英語学校の設立、海運会社の創立、富士裾野の開墾など地域開発に努めた。

東海道の遺跡を紹介する趣旨の本稿では江尻宿の項で触れなかったが、清水市内に残る次郎長の遺跡を訪ね歩くのも一興。駅に近い所から先ず船宿「末廣」。清水港の振興に尽力した晩年の資料等を展示。次いで次郎長が建立した咸臨丸殉難者の供養塔、「壮士の墓」。墓碑の筆は鉄舟の揮毫になり、裏面に「明治元戊辰歳九月十八日」の日付が刻まれていた。次は次郎長通りに残る生家。最後に次郎長が大政・小政・石松・妻てふ等に囲まれて眠る梅蔭寺。次郎長の墓碑の筆は後に海軍大臣にまで登りつめた榎本武揚。実は武揚、函館五稜郭の戦いに敗れ、政府軍に投降しているのである。一方、最後まで死に場所をここと決めて戦ったのが、元新撰組副長の土方歳三。榎本については安倍公房が、同名の『榎本武揚』という小説を書き、土方歳三については司馬遼太郎が名作『燃えよ剣』を著している。私情を差し挟むならこの際、明治維新の隠れた立役者である山岡鉄舟を主人公にした小説を著す作家が、私の目の黒い内に出で来てくれる日を待ち望んでいる次第。閑話休題。